2023 年 3 月　日

事後評価報告書　一般社団法人ぷれジョブ	
生きづらさのある市民の居場所づくり ぷれジョブを核にした安心・安全な町づくり事業	E-mail:miyao.0107@gmail.com URL https://www.purejob.net
資金分配団体名　公益財団法人長野県みらい基金 資金分配団体事業名	事業の種類　草の根活動支援事業 実施期間　2020 年 4 月～2023 年 3 月

1　事業概要

社会課題	小海町（人口４４２７人）は、東信地域南佐久郡の中心にあり、JR 小海駅は鉄路のみならず近隣町村の運営する巡回バスの起点でもある。中学校も近隣２村との組合立で運営されているが、少子高齢化の進む山間地域には「困難を抱えた子ども・若者とその家族」を支える社会資源が慢性的に不足している。自然環境を活かした地域振興の可能性と若年層の地域定着が接合されておらず、住民間に地域の未来像が展望されていない。
事業概要 対象者	困難を抱えた子ども・若者とその家族を含む地域住民全員　100 世帯 行政・医療機関・教育機関・福祉機関地域産業・駅前商店街　200 人
中長期目標	小海町を中心とした南佐久地域において、「困難を抱えた子ども・若者とその家族」を含めた地域住民が安心と安全を分かち合う「拡大家族」となることから、この地域全体に「共創社会」が実現する。
出口戦略	『えきノまちあい室』が困難を抱えた子ども・若者の居場所として定着する。南佐久地域在住の生きづらさのある市民の生活と仕事を包括的に支えるセーフティネットが確立される。

小海高校美術班のペイント作業

『えきノまちあい室』での団欒

２　事後評価実施概要

評価の体制

外／内	氏　名	所属・役職	評価の分野
内部	宮尾　彰	一般社団法人ぷれジョブ　理事	調査内容の整理
内部	西　幸代	一般社団法人ぷれジョブ　代表理事	調査内容の精査
外部	由井　和也	ＪＡ長野厚生連佐久総合病院小海分院院長	調査内容の精査
外部	柴崎　好広	はぁーと工房ポッポ施設長	調査内容の精査
外部	中嶋　実	小海町立小海町高原美術館学芸員	調査内容の精査

事後評価のポイント

①　どんな変化をこの事業の重要なポイントとして設定し評価を実施したのか？ ・ＪＲ小海線小海駅舎内の空きスペースを活用した居場所『えきノまちあい室』が開設したことによって、地域住民の生活にどのような変化が生まれたか？ ・『えきノまちあい室』事業の継続によって、この地域に「生きづらさのある市民」に対する理解や支え合いの精神がどれだけ啓発されたか？ ・『えきノまちあい室』事業は、地域住民の必要性（ニーズ）に具体的に応えられたか？
②　どんな調査で測定したのか ・『えきノまちあい室』利用者への聞き取り調査 ・ステークホルダーへの聞き取り調査 ・地元商店街関係者、学校関係者などへの聞き取り調査
③　調査結果をどのように深掘りし価値判断をしたのか ・調査結果を評価者が共有し、事業全般について振り返りながら達成度と未達成の課題などについて分析を行った。 ・今後、この空きスペースをどのように活用して行けるか？について具体的なアイデアなどを調査結果から割り出すことも目的としながら深掘りした。

３　事業の実績

主な活動とアウトプット

小海駅舎内の空部屋に『えきノまちあい室』を開設
一般社団法人ぷれジョブ（月・水・金）、長野厚生連佐久総合病院小海分院・小海診療所（火）、はぁーと工房ポッポ（木）の３団体でバリエーションのあるメニューを提供。

アウトプット１ **①　アウトプット『駅の待合室』が困難を抱えた子ども・若者の居場所として開設される。** ②　指標　・『えきノまちあい室』案内パンフレット作製、配布回数。 　　・行政、関係機関、地域住民への周知度。 ③　初期値　０ ④　目標値　パンフレット５００部作製、１回配付 ⑤　目標達成時期　２０２０年９月 ⑥　実績値　パンフレット５００部作製、１回配付 　・シャッターペイントなどを通じて地元商店街関係者にも「居場所」として認知された。
アウトプット２ **①　アウトプット『駅の待合室』が６カ町から「中間教室」運営を受託する。** 　在宅生対象のオンライン学習支援が保証される。 ②　指標　・複数の子ども・若者への支援の継続⇒自己実現 　　・IT 機器を活用した学習支援の提供⇒学力向上 ③　初期値　０ ④　目標値　最終年度末の事例検討会開催 ⑤　目標達成時期　２０２３年３月 ⑥　実施値　・１名の不登校生徒の自己学習を支援し、志望校合格を果たした。 　　・６町村共同の運営による「中間教室」の開設は果たせなかった。
アウトプット３ **①　アウトプット『駅の待合室』で出会った人同士が参加するぷれジョブこうみの定例会が月１回定例で開催される。** ②　指標　・月１回の定例会開催（3 年度で 36 回） ③　初期値　月１回の開催 ④　目標値　定例会開催の継続（3 年度で 36 回開催） ⑤　目標達成時期　２０２３年３月 ⑥　実施値　・２０２２年度のついてはコロナウイルス感染症の影響により開催が滞ったが、はじめの２年度については月例で定例会が開催された。

アウトプット４ **①　アウトプット　駅舎を活用した『公開講座』がリアルとオンラインの双方を援用して月１回定例開催されるようになる。** ②　指標　　・公開講座の開催回数 ③　初期値　0 ④　目標値　人権教育研修会の報告書作成 ⑤　目標達成時期　２０２３年３月 ⑥　実施値　・２０２１年７月に東信教育事務所主催による東信地域市町村教育委員会人権教育担当者スキルアップ講座の講師を担当し、約１００名の参加を得た。
アウトプット５ **①　アウトプット　小海町社会福祉協議会が事務局を担う「南佐久居住支援協議会」が設立される。** ②　指標　　・「新たな住宅セーフティネット制度」への参画 地域のニーズに応じた個別支援件数 ③　初期値　0 ④　目標値　「居住支援法人協議会」の設立（国土交通省より認可） 「長野県住宅確保要配慮者円滑入居賃貸住宅事業」登録 個別支援件数：3 件（2021 年 3 月） ⑤　目標達成時期　２０２０年８月 ⑥　実施値 空き物件開拓２７件　　居住支援対象者５名（内３名が入居）
アウトプット６ **①　アウトプット　小海町高原美術館と共同で「子どもの『個』を尊重する文化＝「浮田要三と『きりん』の世界」展を開催する。** ②　指標　　・展覧会の開催実現 ③　初期値　0 ④　目標値　展覧会の延べ来館者数 ⑤　目標達成時期　２０２２年１１月 ⑥　実施値　延べ来館者　関西地域からの来館者を含め１５７８人に上り、好評を得た。

インプット

資金	9,950,000 円　内訳　直接事業費　8,457,500 円　管理的経費　1,492,500 円 評価関連経費　450,000 円　コロナ対応緊急支援追加額　2,637,965 円
人材	内部：合計６人（担当者２人、理事・監事４人）外部：合計６人（運営委員）
資機材	事業専用パソコン、オンライン化のための音響機材・映像機材一式、パソコンタブレット等

外部との連携の実績

←『えきノまちあい室』案内チラシ

地域おこし協力隊との町歩き→

←小海小学校職員研修会にて

「浮田要三と『きりん』の世界」展示風景

小海高校美術班によるシャッターペイント

当初の医療保健福祉分野とのコレクティブインパクトを入口として、事業の後半には新たに小海町立小海町高原美術館での展覧会開催を事業の柱とした。さらにこれをきっかけにして、地域の学校との連携を模索した。展覧会「浮田要三と『きりん』の世界」開催時に展示作業にも参画した『えきノまちあい室』利用者と地域文化を掘り起こす展覧会の運営にも関わった。事業終了間際には、小海小学校生徒の写真展を『えきノまちあい室』で開催することができた。

こうした流れを振り返ると、特定の「生きづらさのある市民」をどのように支援するか？という「医学モデル」的発想から、一人の市民としてどんな活動に参加できるか？という「社会モデル」的発想へと、私たちの事業運営が視点を転換する経過であったとも考えられる。事業開始当初、私たちの視点は「社会的に困難を抱えた市民」という狭い枠組みを想定したものだったが、３年度の事業を終えるに当たって、「『特別な市民』に限定されない、真の意味におけるインクルーシブ（包摂的）な社会の共創」という理想に気づくことができた。

4　アウトカムの分析

アウトカム１

① 不登校・ひきこもりの状態にある子ども・若者が、家から一歩踏み出し、家族以外の住民と出会い、地域社会に触れるようになる。

② 指標　　・『駅の待合室』利用者への聴き取り調査
　　・『駅の待合室』共同運営者への聴き取り調査

③ 初期値　０解

④ 目標値　・聴き取り調査まとめ

⑤ 目標達成時期　２０２３年４月

⑥ アウトカム発現状況（実績）

〇地元中学の不登校生徒が駅舎で受験勉強し、志望校に合格した。
小学以来不登校が続いている男子に働きかけ、駅舎での関係構築から学習支援へと時間をかけて取り組んだ。後半には生産物直売でのぷれジョブも実施。自信回復と対人関係力の蓄積を果たした。
支援の頻度：週３日　（家庭訪問・学習支援）　延べ　８３回

〇火曜日は医療機関による「暮らしの保健室」活動を展開した。

地元薬局や認知症ミーティング等との協働をも実現した。
佐久総合病院附属小海分院・小海診療所による暮らしの保健室」では週ごとに「医師または医療スタッフによる健康相談」、NPO豊里薬局による「漢方カフェ」、委託事業による「認知症本人ミーティング」、運動トレーナーによる「ポールウォーキング講座」などのローテーション制での運営が定着した。

〇木曜日は社会福祉法人ジェイエー長野会多機能型事業所「はぁーと工房ポッポ」が、小海町から委託を受けた「地域活動支援センター」としてえきノまちあい室で活動を継続した。開催日には、５名ほどの利用者が２名のスタッフと自己選択によるメニューで各々自主的に時間の過ごし方を決めて活動している。コロナ禍のため制限されながらもパン販売などの地域に開かれた活動にも力を入れた。

〇行き場の無い少年が居場所を起点に地域住民と関係を作り始めた。
ある事情から、数年間町を離れて戻って以来行き場を無くした少年がえきノまちあい室を利用することにより少しずつ人間関係を築き直す作業を重ね、展覧会の企画にかかわった。自信を回復して周囲の大人との関係も結び直し、自立生活に活動に着手した。

『えきノまちあい室』利用者の声

「ここに来ると、落ち着いて勉強できるところがいいです。ここは暖かいです。」【利用者】
「広い年齢層の方が気軽に集まって来る場所になると町としても意味がある。」【行政職員】

アウトカム２

① 南佐久地域在住の不登校生徒が、安心して学びの場に参加するようになる。コロナ禍の影響下の在宅の学習支援がIT器材の活用により推進され定着する。

② 指標　　・６カ町村の教育委員会による『駅の待合室』への期待度調査
　　・児童生徒と家族の安心度（聴き取り調査）
　　・『駅の待合室』共同運営者への聴き取り調査

③ 初期値　０解

④ 目標値　・延べ利用者数の上昇　利用者の生活の充実度の変化

⑤ 目標達成時期　　２０２３年４月

⑥ アウトカム発現状況（実績）

〇不登校生徒がタブレットを活用して自己学習を始め、学習習慣が定着した。前述の男子生徒への学習支援の際、ゲーム等IT機器に親和性が高いことが確認された。コロナ対策追加助成金により手配したタブレットを活用して学習支援ソフト『すらら』に取り組んだ。ゲームキャラクターの指示に従い自分の決めたペースで学習できるため、それまで昼夜逆転していた生活にリズムが出来、学習する習慣を獲得できた。この事例により、家庭から出れない子どもたちへのアプローチにこうした教材の活用が有効であることが確認できた。

〇母親からえきノまちあい室を紹介された中学校男子生徒が英語の学習に通い、苦手教科への自信を取り戻した。

学力不振から教科学習への自信を無くしかけていた男子生徒２名が、ジョリーフォニックスのメソッドによる個別対応の英語学習に参加した。母親たちからは、教育行政のしくみや進路選択の課題などについて質問を受け、東信地域全体の視野から社会資源や高校卒業資格取得の道筋などについて情報提供や助言を行った。

『えきノまちあい室』への周囲からの評価

〇令和４年度小海小学校グランドデザインにも「～ふるさと小海の「ヒト・モノ・コト」に学び、ふるさとを愛し、未来を生きる子どもを育成する生活科、総合的な学習の時間を中核とした学び～」と謳われています。「総合的な学習」には「生徒たちが学んだことを自分たちの力でまとめて発表すること」も含まれています。今回の写真展は、これまで地域との結びつきを大切にして来た４年１組の学習成果を駅舎に展示していただくことができ、広く町民の皆さんにご覧いただいた上に、感想まで寄せていただける大変貴重な機会となりました。

【町立小海小学校校長】

〇宮尾さんから「人権教育」という話を聴き、自分たちのやって来たことは人権を回復する作業なんだと気づけた。シャッターが閉まった時、この場所でインスタグラムの写真を撮るなど、地域にとっても影響が出れば良いなあ、と思っている。

【小海高等学校美術教諭】

アウトカム３

① それまで触れ合う機会を持たなかった様々な市民が平等な関係でつながり、地域社会に自分の出番を得るようになり、地域の一員としての誇りを回復する。

② 指標　　・駅前商店街関係者への聴き取り調査
　　・児童生徒と家族の安心度（聴き取り調査）

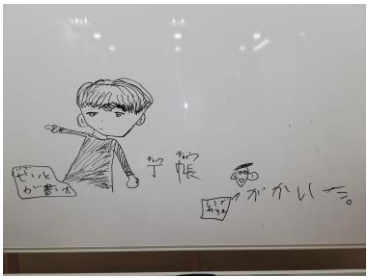
③ 初期値　過去２年間で総計 24 回の開催を重ねる

④ 目標値　延べ利用者数の上昇　利用者の生活の充実度の変化

⑤ 目標達成時期　２０２３年４月

⑥ アウトカム発現状況（実績）

〇ぷれジョブこうみの定例会に新しい町民メンバーが参加初年度の末に開催したキックオフイベント（映画上映会＋対話会）が効果を上げ、地域づくりに関心のある町会議員と芸術家がぷれジョブの活動に参加。ジョブサポーターや受入れ企業として協力を開始。定例会にも参加し、子どもたちとかかわりを持ち始まった。「えきノまちあい室」にも時々顔を出して事業の進捗に関心を寄せている。



〇ぷれジョブこうみの定例会を駅舎２階『駅ウエ』で開催。ぷれジョブに参加する子どもの兄弟も地域に知り合いが増え、親子でえきノまちあい室に来るようになった。兄弟が家族以外の大人と接している風景から、自分らしく過ごせる場として駅舎を感じ始めると、左の落書きに見るような自由な自己表現も生まれて来る。親子がえきノまちあい室に来てくれたことに刺激され、高校生の展覧会が実現した。

【現状】新型コロナウイルス感染症の拡大の影響で、定例会の開催はかなり制限されている。

『えきノまちあい室』に寄せる期待

〇「不登校や」「ひきこもり」と言われる子ども・若者が増えている今のような時代に必要な社会資源だと思います。同時に、これから駅前ににぎわいを創出するためにも重要な役割を担ってもらえるよう、期待しています。

【駅前商店街アルル組合長】

〇フォーマルな枠組みでは、安定しない生きづらさを持った人に関わる中で、福祉的な就労により生活の基礎基盤を作ろうと躍起になっていましたが、その方にとって居心地の良い場所作りがまずは必要であろうという中で『えきノまちあい室』と関わらせていただきました。枠にはまらない柔軟な個別支援の中で、様々な経験、役割を本人に持たせてくれたことが良い刺激になり、決めた曜日には休まず通い、他者と関わる中で、少しずつ社会性を身につけていけたと思います。インフォーマルな支援で『えきノまちあい室』が関わったことが大きな効果だと思っています。

【南佐久地域相談支援専門員】

アウトカム４

① 新しい学びの場に参加する過程で、リアルとオンライン双方による参加者相互に年齢や社会的立場を超えた生涯学習のチャンスが生まれる。

② 指標　　・映画『道草』上映会＋対話会
　　・人権教育研修会・シャッターペイントの実施
　　・小海町高原美術館との共同企画による展覧会

③ 初期値　０解

④ 目標値　・延べ利用者数の上昇　利用者の生活の充実度の変化

⑤ 目標達成時期　２０２３年４月

⑥ アウトカム発現状況（実績）

〇キックオフ企画として、映画『道草』上映会＋対話会を開催（町役場大会議室）

障害のある青年の自立生活を描いた映画『道草』を上映。続いて宍戸大裕監督と由井和也医師（小海分院）と一般社団法人ぷれジョブ理事宮尾による鼎談を、リアルとオンラインのハイブリッド形式で開催。小海町内外から１００名余りの参加者を得ることができた。開催に向けて事業の中長期目標に掲げた「小海町を中心とした南佐久地域において、『困難を抱えた子ども・若者とその家族』を含めた地域住民が安心と安全を分かち合う『拡大家族』となることから、この地域全体に『共創社会』が実現する。」意味について議論を重ねた。

〇教育事務所生涯学習課主催「市町村人権教育研修会」を担当した。

小海高校美術班によるシャッターペイントと展覧会を開催した。コロナ禍により表現の機会を制限されてきた高校生が鉛色のシャッターを自由奔放にペイントした。その過程を視察した教育事務所指導主事により、えきノまちあい室と小海高校の取り組みが市町村の人権教育担当者対象の研修会に取り上げられた。『えきノまちあい室』を活用した展覧会も開催し、多くの町民が訪れた。この協働が、最終年度の小海町高原美術館への企画協力事業につながり事業運営の視点に「医学モデル」から「社会モデル」の導入を図る契機となった。

〇『えきノまちあい室』で写真展『小海小の四季』を開催した。

人権教育担当者研修会と美術館への企画協力がきっかけとなり、小海小学校４年生の写真作品を『えきノまちあい室』に展示した展覧会を開催した。会期中にはクラス在籍の生徒と家族や、信濃毎日新聞朝刊を読んだ小海町内外の市民が来室し、好評を得た。

寄せられた『えきノまちあい室』活用へのアイデア

・「お茶飲み、おしゃべりの出来る場所」
・「カフェ、小海駅の歴史ミニ美術館、駅弁を作って売る、駄菓子屋、映えスポット、食堂」
・「スーパーマーケット、ゲームセンター、コンビニエンスストア、タコ焼き屋」
・卓球場、エアーホッケー

【『小海小の四季』来場者】

アウトカム５

① **南佐久地域に在住するさまざまな生きづらさのある市民の生活と仕事を包括的に支えるセーフティネットが確立される。**

② 指標　　・居住支援の利用者数（実数把握）

　　・居住支援利用者の自己実現（モニタリング）

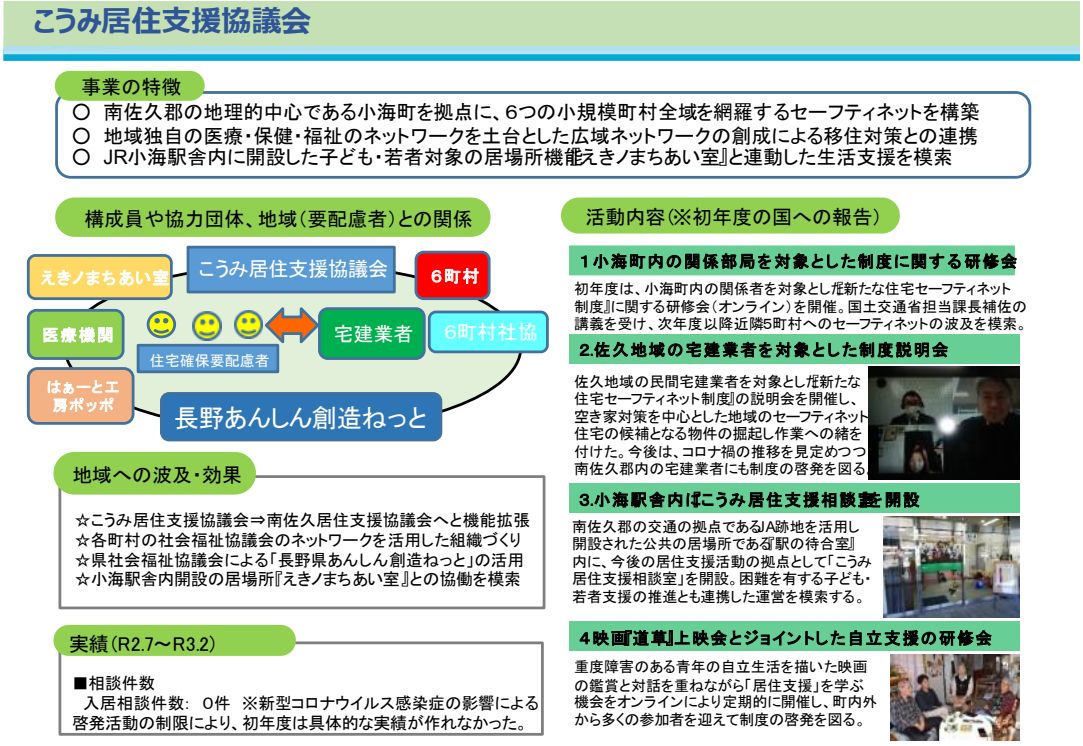
③ 初期値　初年度に小海町社会福祉協議会に移管

④ 目標値　小海町社会福祉協議会による資料を参照

⑤ 目標達成時期　２０２３年４月

⑥ アウトカム発現状況（実績）

〇初年度８月に「居住支援法人協議会」の設立（国土交通省より認可）を果たす。



こうみ居住支援協議会を小海町社会福祉協議会に移管。南佐久郡への波及を目指す。

総会において「こうみ居住支援協議会」の運営を小海町社会福祉協議会に移管する手続きを完了した。これにより、同会がより地域に根差した活動を担う組織として周辺５町村を含む南佐久郡全体に波及するための基礎が固められた。

空き物件開拓２７件　居住支援対象者５名（内３名が入居）

『南佐久居住支援協議会・居住支援法人』への期待

〇佐久地域の住宅セーフティネットの先駆となって他の市町村の模範となってもらいたい。

〇身近な課題（高齢独居者、事情で単身で住む方など）の支援につながると思い、将来的に必要なことを感じた。勉強になりました。　【近隣町村職員】

アウトカム６
※補足説明
　当初、本事業には５つの中長期目標が掲げられ、それぞれに従って５つのアウトプットとアウトカムの指標が示されてスタートした。新型コロナウイルス感染症の影響下での事業遂行に伴い、中間評価の時点で当初の計画に加えて新たな視点の導入が求められることとなり、資金分配団体との協議を経て、６番目の事業目標が据えられる結果となった。
　つまりは駅舎を活用した居場所「えきノまちあい室」運営における保健・福祉・医療分野との連携に加えられた、小海町高原美術館と小海町内の学校との協働による文化芸術事業と駅前活性化事業への接続であった。
　３年度の事業を振り返ると、当初の「医学モデル」に留まらず「社会モデル」へと視点を拡張することにより、「生きづらさのある市民」に限定されない小海町内外の市民全般を対象とした『生涯学習の機会』を提供する、という大きな成果を上げることが出来た。
　同時に、美術館が従来から展開して来られた地元学校へのアウトリーチ事業の延長線上に当事業を置くことが可能となり、小海高校生徒や小海小学校児童の展覧会への参画や、駅舎の壁面を活用した写真展へと「子ども・若者を主人公とした」事業展開につながった。
　以上述べたように、南佐久地域の医療センター機能を担う佐久総合病院小海分院を中心に想定した福祉的事業が、異業種との協働を経て、より多様性に充ちた文化活動と接合されたことは当事業にとって想定外の大きな成果であった。

①　小海町立小海町高原美術館との協働により「子どもの『個』を尊重する文化」を啓発するための展覧会を開催し町内の多様な世代に意識変革を働きかける。

②　指標　　・展覧会の延べ来館者数
　　・展覧会の開催に協力した子どもや若者への聴き取り調査

③　初期値　０解
④　目標値　小海町高原美術館による目標入館者数
⑤　目標達成時期　２０２３年４月
⑥　アウトカム発現状況（実績）
〇展覧会「浮田要三と『きりん』の世界」の開催により「子どもと大人が対等な関係で向き合う文化」を見直す機会を実現し、小海町内外から延べ１５７８人の来館者を得た。
「医療モデル」から「社会モデル」への視点の転換により、小海町立小海町高原美術館とのコラボレーションを強化拡充しながら、展覧会の企画を実現することができた。
会期終了前に開催したエンディングセレモニーの会場には、２年度目にえきノまちあい室を利用して志望校への合格を果たした少年の家族（彼自身はアルバイトのため来れず、母親と二人の兄弟）や、今年度家族以外の市民との関係づくりを始め、１週間展覧会の展示作業にスタッフの一員として従事した少年、同じく英語学習に参加した少年らも参加した。同時に、県外でぷれジョブに参加している障がいのある少年とご家族、美術館監視員のシルバー人材

センター職員、幼児を連れた親子連れなど、社会的地位や属性を超えた多様な人間が一人の「個人」という対等な立場で参加した。その場に現出した風景は、期せずして今回私たちが当事業の『中長期アウトカム』に掲げた、**「小海町を中心とした南佐久地域において、『困難を抱えた子ども・若者とその家族』を含めた地域住民が安心と安全を分かち合う『拡大家族』となることから、この地域全体に『共創社会』が実現される。」**という理想の実現への歩みが緒に就いたことを象徴していた。

「浮田要三と『きりん』の世界」展に寄せられた感想から

・「浮田さんの抽象画も良かったけど、『きりん』がとても良かった。子どもの詩や絵が大人っぽくて特に詩がませているように感じて驚いた。こんな世界があったんだなあ。」

・「浮田さんの作品の赤・白・黄が、何か戦争の影響のように感じて、その中の黄色は希望の光のイメージなんじゃないかなあと感じた。『きりん』を観て何か懐かしい気がした。」

・「『きりん』の映像で流れている詩を読んで、子どもの素晴らしい感性に心を動かされた。忘れていた大切な気持ち等を思い出させてくれた。灰谷健次郎の『兎の眼』を読んで教師に成りたいと思ったので、ここで『きりん』とのつながりがあることを知ることが出来て良かった。上田のエディターズミュージアムも一度訪ねてみたい。

【「浮田要三と『きりん』の世界」結果報告書　小海町高原美術館より引用】

アウトカム達成度への評価

アウトカム１【達成度　高】

〇不登校・ひきこもりの状態にある子ども・若者が、家から一歩踏み出し、家族以外の住民と出会い、地域社会に触れるようになる。

⇒人数は少ないながらも、『えきノまちあい室』を利用したことにより、それまで家族以外の人間関係を築く機会を持たずに生活していた少年たちが、自信を取り戻し、自分自身の意思で進路を選択しようとするまでに変化したことは大きな成果であった。一人は志望する高校に入学を果たし、学業とアルバイトの両立を実現した。もう一人は、それまで不安定だった生活のルーチン化を徐々に実現し始め、自立生活に向けて就職活動を意識し始めている。

アウトカム２【達成度　低】

〇南佐久地域在住の不登校生徒が、安心して学びの場に参加するようになる。コロナ禍の影響下の在宅の学習支援がIT器材の活用により推進され定着する。

⇒当初の計画では、南佐久地域６か町村の教育委員会の共同運営による学校に行けない生徒の学びの場としての「中間教室」の開設を目指したが、果たせずに３年度を終える。他方で『えきノまちあい室』で出会った何人かの子どもたちには、個別に向き合う中で一人ひとりの課題や必要性を捉え、具体的な支援を行うことにより、一定の成果を上げることができた。

アウトカム５【達成度　高】

〇南佐久地域に在住するさまざまな生きづらさのある市民の生活と仕事を包括的に支えるセーフティネットが確立される。

⇒新型コロナウイルス感染症の影響を受けて予定よりも早期に対処することにより、初年度の内に国土交通省の認定による「居住支援協議会」の設立を果たすことができた。継続的に交渉を続けた結果、二年度目には小海町社会福祉協議会へと事務局機能を移管し、その後は対象エリアが小海町から南佐久郡全域に拡張され、先駆的な支援が展開されている。

波及効果

「生涯学習」の視点を導入した効果

「生きづらさのある市民」への支援から始まった当事業が、途中から学校現場や美術館との協働をきっかけとして誰もが人生をかけて学べる可能性を模索する「生涯学習」の視点を得たことの意味は大きかった。

特に、準備に３年をかけて小海町高原美術館で開催した「浮田要三と『きりん』の世界」展では、「子どもと大人が対等に向き合う文化」を標榜した児童詩誌『きりん』とその編集者で現代美術作家の浮田要三の画業を我が国で初めて紹介することができた。

同美術館は、かねてから積極的に町内の学校と『対話的鑑賞』を軸とした交流事業を継続しており、その成果は『芸術の畑に種を蒔く』展に結集された。その折に小海小学校４学年の生徒による写真も展示されたが、同じ生徒の写真作品を『えきノまちあい室』に展示した『小海小の四季』を開催することができた。地元の小学生の家族や一般町民が訪れ、駅舎の空きスペースの今後の有効活用についてさまざまな意見を聴取する機会にもなった。

5　成功要因・課題

アウトカム１

〇不登校・ひきこもりの状態にある子ども・若者が、家から一歩踏み出し、家族以外の住民と出会い、地域社会に触れるようになる。

⇒長野県内、ひいては小海町が属する東信地域においても、不登校や若年層の自殺の課題は長年の懸案事項である。山間地の小さな町である小海町も、規模は小さいものの同様の課題を抱えた家庭は潜在しているものと考えられる。

『えきノまちあい室』事業では、運営にかかわる委員から直接的に個別の支援ニーズを紹介されたことから、顔の見える関係性を踏まえたアプローチが可能となった。

アウトカム２

〇南佐久地域在住の不登校生徒が、安心して学びの場に参加するようになる。コロナ禍の影響下の在宅の学習支援がIT器材の活用により推進され定着する。

⇒文部科学省により打ち出された「教育機会確保法」を受けて、県及び市町村にわたる行政機関には、従来にも増して「生きづらさのある子ども・若者を対象とした学びの場」をどう保障すべきか、という喫緊の課題への具体的施策が期待されている。

当事業が着目したのもこの点であったが、当方の力不足と交渉の未熟さもあって、各町村の教育行政から「学びの場」づくりというミッションの委託を受けることが果たせなかった。

6　結論

事業開始直前の新型コロナウイルス感染症の拡大を受けて、事業全般が大きく制限された。反省として当事業を実施する小海駅舎のある小海町の町政、産業、教育、医療、福祉などの諸条件についての事前のリサーチが不足していた点が挙げられる。当事業にステークホルダーとしてかかわる関係諸機関への事業説明や合意形成の手続きに不充分な点があり後になってそれが齟齬を生んでしまった。そうした中、町政からの支援によりハード面での環境整備が進められ大変ありがたかった。また、優先順位を再検討して初年度に申請した「居住支援協議会」を町社会福祉協議会に移管できたことも大きな成果だった。

『えきノまちあい室』の運営は、地元の医療機関・福祉施設との共同運営による「居場所」の提供、不登校の中学生の高校受験に向けた学習支援が活動の柱となった。小海高校美術班生徒のシャッターペイントに際しては、地元商店街の店主や JR 小海線の駅員からも、「鉛色で淋しかったシャッターが明るい模様に塗り替えられ、駅全体の雰囲気も明るくなった。駅を利用する人の気持ちも明るくなるのでは？」と期待の声が届いた。また、教育事務所主催の研修会を担当したことから、地元の小海小学校職員会での職員研修講師担当を経て、駅舎での生徒たちの写真展『小海小の四季』の開催に至る事業展開が生れた。

今後は、町政でも最重要施策とされている「小海駅前再整備計画」とのより一層緊密に連携を得ながら、地域に潜在するさまざまなニーズに応えることのできる機能強化を図りたい。

事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度の自己評価

	多くの改善の余地がある	想定した水準までに少し改善点がある	想定した水準にあるが、一部に改善点がある	想定した水準にある	想定した水準にある
(1) 事業実施プロセス	○				
(2) 事業成果の達成度	○				

7　提言

小海高校美術班生徒のシャッターペイントに際しては、地元商店街の店主や JR 小海線駅員からも「鉛色で淋しかったシャッターが明るい模様に塗り替えられ、駅全体の雰囲気も明るくなった。駅を利用する人の気持ちも明るくなるのでは？」と期待の声が届いた。また教育事務所主催の研修会を担当したことから、地元の小海小学校職員会での当事業の紹介へとご縁がつながり、事業の終り近くには小学 4 年生の写真展開催を果たせて大変ありがたかった。

今後の運営については、従来のステークホルダーと町内有志との協議により方向性を確定して行く見通しである。その際には「社会モデル」の視点に基いて町民の豊かな生活を支えるための地域の社会資源ととして発掘した『小学校』や『町立美術館』との協働も視野に入れて行きたいと考えている。

8　知見・教訓

「『学びの場』を学校には限らない」と文部科学省が教育機会確保法で公言したことから、「子ども・若者の居場所」という課題が日本全国で最重要課題の一つになって久しい。

小海駅舎の空きスペースを活用した『えきノまちあい室』事業の３年間を振り返るとき、あらためて地域に潜んで在る「支援ニーズ」（かかわりを求めている心）の奥行きが私たちの想像を超えていることを痛感させられる。それほど、彼ら彼女らの『小さな声』を聴き取る営みが喫緊の課題でありながら、支援関係者にはその最もヒリヒリと痛んでいる傷が見えていないことが多いように思われてならない。

この３年の間に私たちが出会い、この部屋で時間を共にした少年たちの口から漏らされた何気ない一言の奥には、当事者にしか理解できない家族の歴史や「傷つき」の経験が隠れており、丁寧に時間をかけて関係性を築かなければ表現されない内容が深く埋められている。

「これからは、心の中を『嫌な記憶』じゃなくて『楽しい記憶』でいっぱいにしたい。」

この言葉には、長い時間独りで自問自答するしかなかった苦悶が籠められている。安易に発せられる「（もっともらしい）大人からの助言や慰め」を鋭く拒絶する意思がそこにあり、私個人はこの「声」と向き合うことができたに過ぎない。かかわるこちら側よりも、よほど寛容で倫理的な子ども・若者の生きている世界が孕んでいる複雑さや豊かさに対して、大人の側が襟を正すことからこそ、真の意味での「居場所」づくりが始まることを教えられた。